

横浜市 歴史博物館 NEWS 26 2008・3

◇インタビュー 青木美智男

神奈川宿は東海道を旅する人にも新興の廻船業者にも重要だった

◇企画展「古代のムラのカミ・ホトケ」によせて

◇〈研究余話〉増上寺所蔵の『入寺帳』と『寺院成就記』

◇収集・収蔵資料の紹介 [27] 花見山遺跡出土縄文時代草創期土器群

◇〈常設展示室探検〉輸入銭が流通した中世

◇報告：ふるさと横浜探検・箱根旧東海道の石畳と箱根関所を訪ねて

◇〈ちょいとミュージアムショップたいむ〉横浜芝山漆器

◇〈知ってますか?〉グリーンラインが開通しました



元専修大学教授
青木 美智男
(あおき・みちお)

神奈川宿は 東海道を旅する人にも 新興の廻船業者にも 重要だった



◎近世史に興味を持った理由は何ですか。

私は、福島県棚倉町という小さな城下町で育ちました。第二次世界大戦末期、国民学校には、裕福な子どももいれば、貧農の子どももいて、掘っ立て小屋で暮らす同級生が何人もいました。子ども時代の正義感から「なぜ、こんなひどい貧富の差ができたのか」と考え、そのような関係が生まれた江戸時代に関心を持ちました。それでも、建築関係の職人だった父の仕事を継ぐつもりで、実業高校に進学しました。ところが三年生の時、肺結核になり、治ったものの、家職は継げなくなり、その時、地元で読書会が指導を受けた先生から「今、歴史学は若い人でも自由に新しいことができる分野だ」と、当時、無土器文化の遺跡の発掘で話題になっていた明治大学を勧められました。しかし考古学は体力的に難しいので、ちょうど、助教授になられたばかりの木村礎先生が、江戸時代の村落史研究で注目されていたので、近世を選んだのです。その時、子どものころを思い

出し、村落の研究をやろうと決めました。
港の機能をもつ宿場

◎神奈川宿本陣の「石井順孝日記」を翻刻されました。どういう特色のある史料ですか。

石井順孝という人は、先代の当主が亡くなった後、残された幼い子どものために、本陣の主人の代理を務めた人物です。この日記は公的な御用留とは違い、本陣の業務に関することだけでなく、プライベートなことが数多く記されています。「昨夜、飲み過ぎて二日酔いだ」というような、日常的なことがたくさん書かれている点が、他の日記にはない第一の特徴と言えます。地域史研究に活用できる面白い内容です。

◎ほかにも近世後期の神奈川宿に関する論文も出していますが、近世後半の神奈川宿の位置付けについてどう考えますか。

十返舎一九の『東海道中膝栗毛』では神奈川宿についてかなり詳しく書かれています。名物案内的なこの本では、通り

すぎてしまった宿場があります。詳しく書かれたということは、それだけ当時の庶民に注目された宿場だったと解釈できます。神奈川宿は、江の島に参詣する際、東海道からの分かれ道となるところですし、江戸から旅する女性や子どもにとつては、泊まる宿場としても重要でした。宿場の中で町がとつても長く大きな宿場でしたが、日米修好通商条約以後、開港場となった横浜の発展に力が入れられ、したので、神奈川宿は忘れられてしまった感がありますが、最近、宿場の歴史をたどる散歩道が整備されるなど、見直されているのは大変良いことだと思います。

尾張の廻船が特産物を買付に

◎当館で一九九七年に行った企画展「海からの江戸時代」で協力くださいました。その時のエピソードなどありますか。

展示準備のころ、私は愛知県知多郡にあります日本福祉大学知多半島総合研究所に勤めておりました。なぜ展示に協力したかと申しますと、江戸時代、相模や現在の横浜市周辺で生産された小麦が、主にしょう油の原料として、神奈川宿の港から各地に出荷され、知多半島のしょう油醸造業者にまで運ばれていたことが、知多の廻船文書に残っているのを発見したので紹介しました。東海道の宿場の中には、港の機能を備えたところがいっぱいあり、その一つである神奈川港は、物流の関係からも非常に重要な宿場だったのです。廻船問屋といって、入港した船が荷物を運び入れる店が多くありまし

た。大坂と江戸を結ぶ菱垣廻船や樽廻船は入航しませんでした。新興の廻船である尾張の廻船などが、地域経済の中心だった神奈川の港を拠点として活躍し賑わったのです。

市民の心のかてに

◎当館に期待することは。

大きなものがあります。これまでの横浜の歴史研究は、国際貿易など港を中心とした活動に目が向けられ、港の背後にある内陸全体のことにはあまり研究されてきませんでした。そういう意味で、横浜港の背後に広がる地域の歴史にも目を向けているこの博物館の意義は、大きいと言えます。もう一つ、横浜の住民の圧倒的多数はよそから移ってきて、ここで生涯を終えることになる人々たちです。そういう人々たちにとって心のかてとなるのは、その土地の歴史です。その意味で、ここがそうした市民の皆さんにビジュアルな歴史を提供して、終の栖となる横浜に愛着と誇りをもつていただける施設となり、もつともつと活用されることを期待したい。その意味で、地域社会の歴史を具体的に示すような、新しい企画を検討してはどうか、と思います。

▽あおき・みちお プロフィール

●一九三六年、福島県生まれ。明治大学文学部卒業、東北大学大学院文学研究科修士課程修了。日本近世史専攻。日本福祉大学経済学部教授などを経て、専修大学文学部教授となり、二〇〇七年退職。また一九六八年、神奈川県史調査員兼執筆委員に就任。県史編纂にも携わる。古文書の読み替え、文学作品や絵画なども史料に採り入れる民衆史研究を特色とする。

●著書「天保騒動記」（三省堂）「茶の時代」（近世尾張の海村と海運）「百姓一揆の時代」（校倉書房）「東海道神奈川宿本陣石井順孝日記」（近世非領国地域の民衆運動と郡中議定）「日本近世社会の形成と変容の諸相」（ゆまに書房）「深読み浮世風呂」（小学館）など。

企画展

古代のムラのカミ・ホトケ によせて

港北ニュータウン遺跡群の中の古梅谷遺跡（横浜市都筑区牛久保東）は、早瀬川北岸の幅一〇〇メートルほどの谷の中に位置しています。ここでは、平安時代の遺構として、木の杭で護岸された溝状の遺構があり、そこからは「四千」「中」「万」「川刀」などの文字を記した土器、漆塗の巡方が発見されました。また集水榭状の堀り込み部では、完形の土師器・須恵器の坏が重なり合うように集中していました。これは水にかかわる祭りの跡であり、この場所は、近くに存在したムラの水辺の祭りの場であ

つたとみられます。

奈良時代から平安時代にかけての古代のムラでは、水辺の祭りのみならず、建物などを建てるに際し、その地を鎮める祭り・建物の中にカマドを作る際やそれを廃棄する際の祭り・井戸をめぐる祭り・顔を描いた土器を用いた祭り・卜骨を用いた祭り・土器に特殊な字形の文字や何らかの呪力を期待するまじないの記号を記す行為。こうした様々な祭りが行われていました。また、ムラには「社」があり、「社宣」が置かれ、春と秋にはムラ人によって祭りが行われて

いたことが文献資料から知られます。展覧会では、南武蔵・相模の地域社会を中心に、こうした古代のムラの祭りの様相をみていきます。

一方、横浜市都筑区池辺町の荻根不動原遺跡では、奈良・平安時代の竪穴建物や掘立柱建物で構成されるムラの遺跡が発見されています。ここでは、二カ所で二棟以上の掘立柱建物跡群の組み合わせがみられます。いずれも四面に庇が付いた建物とそれに付属する建物から構成されています。また、建物群の周囲からは、灰釉陶器の淨瓶や素焼きの塔である瓦塔の破片がみつ

かっています。建物群はいずれも双堂式の建物配置とみられ、ムラの中の仏教施設と推定されます。

東日本の集落遺跡では、このような仏教施設が置かれたムラがあることが明らかにな

ってきています。それらは、（一）庇付の掘立柱建物が中心で、四

間×五間規模の四面庇付建物が多い、（二）八世紀後半頃から出現し、九世紀に増加するという傾向をもつ、（三）「寺」の墨書土器、瓦塔片、奈良・三彩・二彩壺、鉄鉢形土器、浄瓶・水瓶などの仏教関連遺物が出土する、（四）具体的な寺名を記した墨書土器が出土する場合もある、という様相を示しています。こうした施設は、整った伽藍配置をもつ国分寺などの寺とは異なり、茅葺の建物で、中には仏像や瓦塔が置かれ、灯明が灯されたとみられます。

平安時代初頭にできた仏教説話集である『日本霊異記』には、ムラの人々が建てた「堂」「寺」が登場します。それは仏教施設であると同時に、旅人や旅の僧の宿泊場所、ムラの共同利用食器の保管場所、病者の居住場所など、ムラの人々のつながりを確認する場所としても機能しています。発掘されたムラの仏教施設は、このような「堂」「寺」に当たるといえます。

展覧会では、南武蔵・相模の地域社会を中心に、こうしたムラの中の仏教施設とそれをとりまく様相もみていきます。

古代のムラにおけるカミとホトケは、決して対立する存在ではなく、両者は相まって存在し、習合していったようです。企画展では、カミの祭りとホトケの信仰をとりあげつつ、両者の関係をも探っていきます。古代のムラの人々の様々な信仰形態に思いをはせていただければ幸いです。

（平野卓治）

会期 五月三十一日（土）から七月六日（日）まで



水辺の祭りに使われた墨書土器（古梅谷遺跡）



瓦塔片（荻根不動原遺跡）



鉄鉢形土器（川崎市・宮添遺跡）

増上寺所蔵の『入寺帳』と『寺院成就記』

江戸時代、各宗派の寺院僧侶の養成は、檀林と呼ばれる機関によって行われてきた。その檀林から、現代の大学に発展したものもあります。例えば、駒澤大学は曹洞宗の檀林から、立正大学は日蓮宗の檀林からという具合にです。いずれにしても、各宗派が設けた檀林で、それぞれの僧侶教育が行われていたのです。

横浜地域に六七カ寺を数える浄土宗も、例外ではありません。浄土宗でも、中世から僧侶の養成は各地の檀林で行われてきたが、江戸時代になると増上寺（東京都港区）をはじめとする関東十八檀林が養成機関として確立し、寺院の住職を望む者は、そのいずれかに入寺して、学問修行を行わねばならなくなりました。

一 『入寺帳』とその掲載記事

入寺した寺院の弟子は、現在の学籍簿のようなものである『入寺帳』に記載されます。『入寺帳』には、所化（学寮に住し修行する僧）の出身地・出身寺院・年齢・師匠名はもとより、入寺して後の所属学寮名、指南者名、在籍年数、また出寺後の住職地、改名の有無、さらには寂年等が記されており、その後の僧侶の動

向を追う上で欠かせない史料となっています。横浜地域の浄土宗寺院の弟子の中にも、関東十八檀林に入寺した者が沢山いますし、また、他所の弟子で修行の後、地域の寺院の住職となった者もいます。では具体的に、増上寺に入寺した所化の記載内容を見てみましょう。

【史料二】

〔享保一八年正月〕

宝暦十二年七月朔日小机泉谷寺成就消帳

月番恢弁（印）

（十一日）（名目部極新米）

同日 同断 京黒谷金戒

同日 同断 光明寺末江 慧頓

同日 同断 州大路井村

同日 同断 覺善

同日 同断 寺鏡營寛無

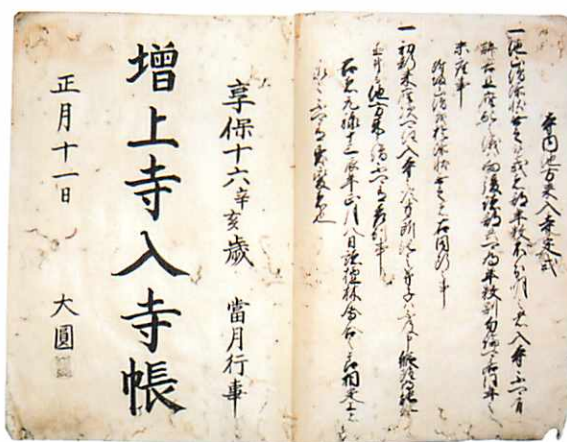
同日 同断 弟子世寿十

同日 同断 五歳寮知訓

同日 同断 指力龍

これは、慧頓という所化の記事です。

この記載から、慧頓は享保一八年（一七三三）正月一日に名目部に新米したこ



『増上寺入寺帳』 享保16年（1731）正月11日の巻の内表紙部分。



『増上寺入寺帳』 享保18年（1733）正月11日の部分。慧頓の記事が見えることがわかる。

とがわかりますし、また彼は、京都の黒谷金戒光明寺の末で、近江国大路井村（滋賀県草津市）にある覺善寺というお寺の鏡營寛無の弟子で、一五歳で増上寺内の知訓寮に入寮し、万龍の指南を受けたこともわかります。

浄土宗檀林の場合、所化の入寺年齢は一五歳以上で、入寺手続きは毎年正月一日と定められていました。入寺者は、規則を守っていくという誓約書を提出して入寺証をもらい、そして、所化の学籍簿である『入寺帳』に記載される仕組みでした。

慧頓は名目部から修行をはじめますが、これは現在の大学のカリキュラムのようなもので、入寮した所化は、名目部・顕義部・選択部・小玄義部・大玄義部・文句部・礼讃部・論部・無部の九学課を修学することになります。各部は三年の年限があり、すべて終了するのに最短二七年かかります。

無部の修行が終了する

と、ある者は寺院住職になったり、増上寺に残って山内の役職に付いたり、学寮の寮主になって後輩の指導に当たったり、いわゆる現代の就職をすることになります。

慧頓は『入寺帳』の記載から、小机泉谷寺（横浜市港北区）の住職になったことがわかります。もう少し詳しく見てみると、慧頓は、宝暦十二年（二七六二）七月朔日に小机泉谷寺に「成就」し、「酒帳」とあります。「成就」とは、寺院の住職になることです。泉谷寺の歴代住職を見ると、第二〇世中興として恵頓上人がいます。これが慧頓のことと思われます。つまり、彼は享保一八年に増上寺学寮に入寺し、宝暦一二年に泉谷寺の住職になったのです。増上寺に入寺してから実に二九年間の修行を経てのまさに「成就」、慧頓四四歳の時でした。慧頓は天明五年（二七八五）一〇月三日に寂します。寂年まで住職を務めていたかどうかは定かではありませんが、務めていたとすると二三年の住職期間となります。

二『寺院成就記』とその掲載記事

これまで入寺帳の記載から、多くの情報が見られるのを見てきました。慧頓という僧侶が二九年の修行の後、小机泉谷寺の住職に就いたこともわかりました。しかし、泉谷寺の歴代住職を見ると、『入寺帳』に記載の無い僧侶が同寺の住職になっている例が沢山あります。

例えば、恵頓は前述の通り、二〇世中興として泉谷寺の歴代住職に出てきます

が、二一世恵海・二二世成運・二三世智順・二四世智啓・二五世覚山・二六世了真・二七世憲義・二八世定信と次第する歴代住職の内、二三世智順の名は『入寺帳』に見えるものの、他の住職はその記載がありません。

では彼らはいったい泉谷寺の住職となつたのでしょうか。一般的に寺院住職の寂年は、位牌などで明らかにすることは多いのですが、何時住職になったのかについては、わからない場合が多いのです。これがわかれば、例えば年末詳の文書等の年代比定が、出来やすくなるというメリットがあります。それは寺院の歴史等を調べる上で、大変重要な情報の一つとなるのです。

増上寺には、『寺院成就記』という史料があります。これは安永八年（一七七九）からしか残存せず、その記載年代は限られるのですが、先に上げた泉谷寺の住職の就任日や、同寺ばかりではなく、横浜地域の有力な浄土宗寺院の住職任命日等が明らかにされる史料なのです。

引き続き、泉谷寺を例にとり若干解説してみます。

二一世に成運がいます。成運は『寺院成就記』の安永一〇年（一七八二）

六月の条に次のように記載されます。

【史料二】

金三両 寺内一 閏五月廿 小机

六日一文 泉谷寺

字席回章

出月行事

五人目戒

運和尚依

願六月二

日仰付

何時か不明ですが、二一世の恵海が没したか、隠居願いが出されたりしたのでしよう、閏五月二六日に一文字席（階級席次）に回章が回り、月行事（役職階級）の五番目にいた成運が願ひ出て、同

年六月二日に泉谷寺住職に任命されたことがわかります。金三両はその時のお礼金です。成運は寛政一〇年（二七九八）一〇月二七日に寂しています。寂日まで住職であったと考えれば、一七年間住職を務めたことがわかるのです。

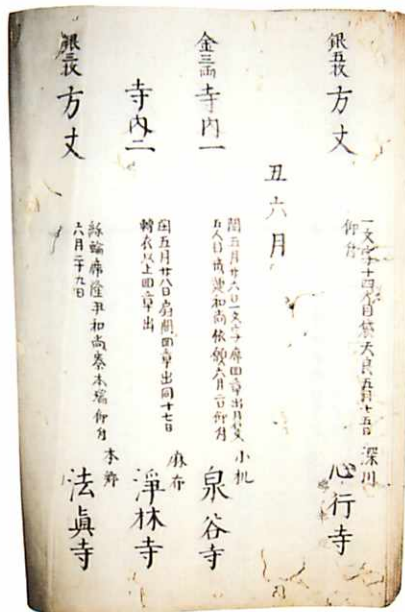
横浜歴史博物館の調査研究事業の一つとして、平成一八年度から三カ年計画で浄土宗檀林資料の基礎研究を行っていますが、増上寺所蔵史料の調査はその一環です。

今回紹介した史料の内、『入寺帳』の分析はこれまでなされていますが、横浜地域に限っては恐らく初めての試みだと思います。また『寺院成就記』においては、その記載内容はほとんど知られていない史料だと思います。

こうした史料の発掘を通し、少しずつでも地域の浄土宗寺院の様相等が明らかになればと考えています。簡単ですが、調査研究の一部を紹介させていただきます。（遠藤廣昭）



『寺院成就記』
安永8年(1779)から明治9年(1876)までの記載がある。



『寺院成就記』 安永10年6月の条。小机泉谷寺と成運の名が見える。

花見山遺跡出土縄文時代草創期土器群

花見山遺跡は、谷本川東岸の丘陵が東に
むかつて張り出した標高五〇～五五mの低
位台地上、都筑区見花山一五～三五（旧緑
区川和町二二六～二二三五）に所在する

縄文時代草創期の集落が見つかった遺跡で
す。縄文時代草創期は日本列島で土器が作
られ始めた時代です。近年発見例は増加し
ていますが、全国的にもまだまだ資料が少
ないです。

この遺跡の調査は、一
九七七年八月から翌一九
七八年六月まで行われ、

草創期の土器や石器などの
遺物や竪穴状遺構などの
同時期の遺構が発見さ
れました。その後の整理
作業を経て一九九五年に
報告書が刊行されていま
す。また、一九九五年一
月には、草創期の資料
がすべて横浜市指定文化
財に指定されました。

花見山遺跡出土縄文時代草創期土器群

出土した草創期の土器
群は約一二〇個体にのぼ
り、パラパラと破片が少
しずつ発見されることの
多いこの時期の資料とし
ては大きなまとまりを示
しています。そのため、
花見山遺跡の資料は草創
期の土器研究に大きな貢
献を果たしてきました。

これらの土器群の特徴の一つは、その器
形にあります。一部に尖った底を持つもの
も認められますが、ほとんどの個体は丸い
底を呈しています。縄文土器の初源ではあ
りますが、縄目文様は施されず、隆線文と
呼ばれる粘土の紐を貼り付けたたりすること
により立体的な文様を作り出している個体
が多くを占めます。

この沈線には、工具を用いて刻目を入れ
る個体や、指などでひねりを加えて波状の
隆線をつくる個体など、いくつかのバリエ
ーションが確認できます。

また他にも、「ハ」の字状を呈する爪形
文様や、工具を用いた沈線による文様など
もみられます。これらは、それぞれが単独
で施文される場合もありますが、他の文様
と組み合わせる用いられることもあります。

また、土器の大きさに大きく分けて大・
中・小の三種類が見られることも特徴的で
す。これは、土器を作り始めた時から、そ
の用途に応じて大きさを作り分けていた可
能性も指摘できるのです。

このように、縄文時代草創期にはまだま
だ解明すべき点がたくさんあります。今後、
これらを解明していく段階でも花見山遺跡
の資料は大いに活用されていくと思われま
す。

（中川「美」

常設展示室探検

輸入銭が流通した中世

中世展示室には、六浦湊（金沢区平
湯湾）で陸揚げされた、中国から
の輸入品（模造）が展示されており、
その中には沢山の中国銭（宋銭）があ
ります。中国銭は平安時代後期より輸
入されはじめ、嘉禄二年（一二二六）
に鎌倉幕府がその公的使用を認めたこ
ともあって、中世社会の一般通貨とし
て戦国時代末まで流通していきまし
た。その種類は唐・宋・明など各時代
の中国王朝が鑄造した様々なものがあ



り、それら貨幣を渾然一体に使用して
いました。

中国銭は穴あき銭一枚を一文とし、
一〇枚で一疋、一〇〇〇枚（一〇〇疋）
で一貫と数えます。また銭穴に紐を通
して束ね、これを緇や連と数えました。
とくに一〇〇枚を束ねて一緇と呼び、
更に高額（多量）の場合は、一〇〇〇
枚（一貫）・五〇〇〇枚（五貫）など、
一定枚数を束ねた固まりで流通して
いたようです。展示してある銭は、一〇
〇〇枚の銭をまとめたものをイメージ
して作られています。

報告

ふるさと横浜探検・箱根旧東海道の石畳と箱根関所を訪ねて

博物館で行っている普及事業のひとつに、「ふるさと横浜探検」があります。これは、横浜市や、横浜の歴史に係る近隣地域を訪れ、当館学芸員や現地の専門家の解説を聞きながらふるさとの歴史、文化に触れるという企画です。今回は、平成一九年一月六日（火）に行われたバスツアー「箱根旧東海道の石畳と箱根関所を訪ねて」について報告いたします。

当日の参加者は三五名。天気は生憎の雨で、石畳を歩けるのか少々不安になりました。箱根関所を出発しました。途中で学芸員による箱根宿の説明を受けながら、郷土資料館に到着すると、参加者の方々の日頃の行いの賜物か、曇天ながら雨は止んでいました。郷土資料館では、館長の大和田公一さんに企画展の解説をしていただき、常設展も見学。なお、大和田さんは最後までツアーに同行くださり、箱根関所や杉並木、石畳についても解説してくださいました。箱根関所は、平成一九年にリニューアルが完了したばかりで、新しく整備された施設を堪能しながら、「箱根では『入り鉄砲』の改めはなかった」など興味深い解説に耳を傾けました。恩賜箱根公園では奇跡的に晴れ間がのぞき、雄大な富士山を眺めながらのランチとなりました。杉並木では、砂利を踏みしめて歩きながら、杉並木の景観の

行程は、博物館をバスで出発→箱根町立郷土資料館→箱根関所→恩賜箱根公園（昼食）→杉並木→箱根神社→石畳を散策→甘酒茶屋からバスに乗り帰館、というものでした。



大和田氏の解説を聴きながら箱根関所を見学



足元注意の石畳散策

保存についてのお話を聞き、箱根神社では、学芸員の柘植英満さんが、関所と同じく平成一九年にリニューアルオープンした宝物殿を案内してくださいました。次はいよいよ石畳散策です。曇り空のもと、鬱蒼と木が茂る午後三時過ぎの石畳はすでに暗く、そのうえ雨上がりで石が湿っていたため、滑らないよう細心の注意を払いながらの散策となりました。最後の最後に大変な道行きとなりましたが、ツアー全体については概ね好評で、アンケートでも、解説などのおかげで新発見があつてよかったというご意見を多数いただきました。

最後に裏話を一つ。実は、このバスツアーには、当初もう一つの候補がありました。蓬萊橋をメインとし、島田宿、金谷宿を訪れるツアーです。ところが七月一日の台風で、なんと蓬萊橋の一部が崩落してしまつたのです。そのため行き先を箱根に絞り、計画を固めたのです。しかし結果としては非常に充実したツアーになりました。蓬萊橋は復旧工事中で、平成二〇年四月から全区間の通行が可能になる予定だそうです。もしかしたら今後、リベンジで島田、金谷ツアーを開催するかもしれません。次回のバスツアーに乞うご期待!!

（小林紀子）

ちよいと

ミュージアムショップたいむ Museum Shop Time

『横浜芝山漆器』

芝山漆器をご存知ですか？
安永年間（一七七五年頃）、下総の国（千葉県、現在の成田空港の近く）の芝山村に発し、江戸で発展した工芸品で、開港後、輸出品として人気を博したことから職人が移住し、横浜が一大生産地となりました。貝類（蝶貝、淡貝、鮑貝、夜光貝等）を中心に、象牙、べっこう、珊瑚などを削り、厚く塗った漆面にはめ込んで模様を作り上げます。漆面に平らに象嵌される通常の漆器工芸とは異なり、形取られた模様がレリーフのように浮き出るのが特徴です。



「雛鳥のフローチ」
（宮崎啓生 作）
84,000円

現在、芝山師として活躍されているのはお二人だけとなり、その貴重な伝統技法を絶やさないようにと横浜芝山漆器研究会の方々が活躍されています。興味を持たれた方は、当館のミュージアムショップでぜひ一度ごらんください。お求めやすい研究生の方々の作品に加え、今なら芝山師、宮崎輝生さんに特別に作っていただいたフローチも販売しています（一点ものですので売れてしまったらごめんなさい!）。（常設展示室の映像コーナーでは『芝山漆器』のビデオをご覧いただけます。いかに多くの職人の手と工程を経て作られていくかがわかって、ちょっと感動モノですよ。）

これからの催しもの

- 企画展「絵でみる考古学—早川和子原画展—」4月5日(土)~5月18日(日)
- 企画展「古代のムラのカミ・ホトケ」5月31日(土)~7月6日(日)
- 企画展「お願い!かみさま、ほとけさま—小絵馬に見る人々の願い—」(仮題)7月26日(土)~9月15日(月・祝)

表紙写真は

武蔵国分寺文字瓦 8世紀後半に造営された武蔵国分寺で使用された文字瓦(文字を記した瓦)の破片です。スタンプで押された「都」(左上)は都筑郡、線刻された「久」(右下)は久良郡が負担した瓦であることを示しています。両郡は横浜域にふくまれる郡です。

??????? 知ってますか ???????

グリーンラインが開通しました

3月30日、市営地下鉄に新たにグリーンラインが開通し、八王子方面や東急東横線方面からのアクセスが一層便利になりました。今年も市営地下鉄では、さくら色に染められたさくら電車が走ります。大塚・歳勝土遺跡公園では、大きな一本桜が春の訪れを伝えてくれます。新しい電車に乗って、遺跡公園に春を感じにきませんか。



PR 読者プレゼント

いつも博物館ニュースをお読みいただきありがとうございます。ニュースに関する感想やご意見をお寄せください。お寄せいただいた方の中から5人の方に博物館オリジナルグッズをさしあげます。はがきもしくはFAXで、お名前、ご住所、年齢、このニュースを手にしたところ、ニュースについての感想・要望をお書きのうえ、平成20年5月31日までに博物館「読者プレゼント係」までお送りください。当選者の発表は、発送をもってかえさせていただきます。



- 11月3日 企画展関連「フロアレクチャー」野焼き
- 11月4日 企画展関連「バスツアー:3つの博物館めぐり」
- 11月6日 ふるさと横浜探検「箱根旧東海道の石畳と箱根開所を訪ねて」
- 11月11日 企画展関連講演会「『鶴見合戦』の資料をよむ」
- 11月15日 企画展関連「バスツアー: 畠山重忠館跡見学と鎌倉街道上の道をおく」
- 11月17日 企画展関連「フロアレクチャー」体験学習「風車づくり」
- 11月18日 企画展関連講演会「南北朝内乱を探る(Ⅰ)」「南北朝内乱を探る(Ⅱ)」体験学習「ぞうりあみ」
- 11月22日 ふるさと横浜探検「国指定重要文化財『武蔵国鶴見寺尾郷絵図』をおく」
- 11月24日 ラストサタデープログラム・学芸員による展示解説【原始Ⅱ】展示室
- 12月8日 「平成19年度横浜市指定・登録文化財展」『横浜の遺跡展』開催(1月14日まで)
- 12月1日 体験学習室ミニ展示「ちよと昔を探してみよう」(4月1日まで)
- 12月9日 文化財展・遺跡展関連「フロアレクチャー」
- 12月15・16日 体験学習「風車づくり」
- 12月16日 文化財展関連講演会「仏像の歴史—平安から鎌倉へ」
- 12月22日 エントランスホールコンサート「チェロで迎えるクリスマス」ラストサタデープログラム・学芸員による展示解説【古代】展示室
- 1月12日 文化財展・遺跡展関連「フロアレクチャー」
- 1月14日 新収蔵資料の展示紹介(1月20日まで)
- 1月16日 古代史講読講座、中世史講読講座(2月13日まで連続5回)
- 1月19日 ラストサタデープログラム・学芸員による展示解説【中世】展示室
- 1月20日 新収蔵資料の展示紹介の解説
- 1月26日 企画展「江戸時代のよこはま—青葉の村々と矢倉沢往還—」開催(3月16日まで)
- 1月26・27日 博物館感謝デー
- 2月2日 開館13周年記念特別講演会「近世後期武相の地域社会と江戸の文化」
- 2月9日 企画展関連「フロアレクチャー」
- 2月9・10日 体験学習「紙すき」
- 2月11日 新収蔵資料の展示紹介(2月17日まで)
- 2月16日 企画展関連「フロアレクチャー」
- 2月17日 企画展関連研究講座「五か村用水について」「土器づくり教室」(3月29日まで連続4回)
- 2月21日 新収蔵資料の展示紹介の解説
- 2月21日 企画展関連歴史散歩<第1回>
- 2月23日 ラストサタデープログラム・学芸員による展示解説【近世】展示室
- 2月24日 企画展関連落語会「大山詣り」
- 3月1日 企画展関連「フロアレクチャー」
- 3月8日 企画展関連研究講座「青葉区域における中世の古道について」
- 3月8日 企画展関連研究講座「近世の石川村を尋ねて—石川村絵図と新編武蔵風土記稿を読み解く—」
- 3月11日 新収蔵資料の展示紹介(3月16日まで)
- 3月13日 企画展関連歴史散歩<第2回>
- 3月15日 企画展関連研究講座「近世前期の前田家蔵場」
- 3月15日 企画展関連研究講座「近代の都筑郡と中里村」
- 3月16日 新収蔵資料の展示紹介の解説
- 3月22日 ラストサタデープログラム・学芸員による展示解説【近現代】展示室
- 3月27日 ふるさと横浜探検「小田原合戦の舞台 山中城・一夜城・小田原城を訪ねて」

横浜市歴史博物館 日誌

二〇〇七年十一月一日~二〇〇八年三月三十一日

横浜市歴史博物館および大塚・歳勝土遺跡公園の利用案内

編集後記

何度か雪の降った寒い冬も終わり、あたたかな日差しが感じられるようになりました。春の企画展では、当館初の企画展「絵でみる考古学—早川和子原画展—」を開催いたします。大塚・歳勝土遺跡を素材に3点の新作を描いていただきました。大塚・歳勝土遺跡がどのように描かれているのか、是非ご覧ください。(m)

- 開館時間 午前9時から午後5時まで(ただし、入館は午後4時30分まで)
大塚遺跡、都筑民家園を除く公園部分は24時間オープン
- 休館日 歴史博物館・大塚遺跡 月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始
都筑民家園 毎月第3月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始
そのほか展示替えなどのため、臨時に休館することがあります。
- 常設観覧料

区分	個人	団体 (20人以上3人につき)
一般	400円	320円
高校生・大学生	200円	160円
小学生・中学生	100円	80円

- ◆特別展・企画展の観覧料は、別に定めます。
- ◆毎週土曜日は、小・中・高校生は無料です。
- ◆「長寿のしおり」「敬老特別乗車証」「愛の手帳(療育手帳)」「身体障害者手帳」「障害者手帳」をお持ちの方は無料です。

- 交通案内図 横浜市営地下鉄「センター北駅」下車徒歩5分
〔「センター北駅」へは横浜駅から23分 新横浜駅から12分〕



- 駐車場あり(1時間200円)
- インターネットホームページ <http://www.rekihaku.city.yokohama.jp/>

